

## 研究ノート

### 最近のキリシタン研究動向

宮崎賢太郎

〔序〕

〔一〕キリシタン研究史概観——史料を中心として

〔二〕現在のキリシタン研究の一動向

〔三〕最近10年間における主要参考文献

- (a)宗教史 (b)思想史  
(c)国語学・国文学 (d)文化史

〔序〕

明治6年、内閣修史局(平井希昌)より『伊達政宗欧南遣使考』が出版されてより、我国におけるキリシタン研究の歴史も既に百年を有している。この間に数多くの先学の業績によってキリシタン史のアウトラインはほぼ明らかにされた観がある。しかるに後に述べるように、昭和40年頃より未刊の原史料が我が国においても用いられはじめ、それ以前の刊本による研究の不備が補われ、修正され、また従来全く知られなかった側面も次第に解明されつつある。また一方では膨大な新史料の前に立ち尽し、諸研究者は思い思いの関心に従って史料に立ち向い、研究者間相互の意志疎通を欠き、全体として一つの方向性が見失われているのが現状であると言えよう。

現在最もよく紹介されているイエズス会関係の史料でさえ、まだ南欧の諸古文書館に眠る全体の一割にもみたくないのではないかと思われる。ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスチノ会関係史料に至っては推して知るべしである。よって組織的・体系的に最も重要なものから次々に紹介し、研究者の便に供することが、キリシタン研究の進捗にとって肝要なことであろう。また国内史料、海外史料の相互の検討の上からも内外の研究者の共同研究が望まれる。

以下史料の問題を中心としてこれまでのキリシタン研究を概観し、未刊の原史料の紹介

に伴う現在のキリシタン研究の一動向を指適したい。最後に宗教史、思想史、国語学・国文学、文化史の4つの分野における最近10年間前後の研究動向を簡単に述べ、主要な著書、論文を挙げて参考に供したい。

#### 〔一〕キリシタン研究史概観——史料を中心として

我が国の学問的キリシタン研究の端緒を開いたものとしては、姉崎正治のいわゆるキリシタン研究五部書——『切支丹宗門の迫害と潜伏』、『切支丹禁制の終末』、『切支丹伝道の興廢』、『切支丹迫害史中の人物事蹟』、『切支丹宗教学』——を挙げねばならない。殊に『切支丹伝道の興廢』(S. 5)は現在に至るまで日本人の手によるまとまった唯一の通史であり、これに匹敵するのはボクサー(C. R. Boxer)の「The Christian Century in Japan」1951、位のものであろう。この意味で姉崎の諸著作は今日でもキリシタン研究を志す者の第1に手にすべき手引書と言えよう。

姉崎は史料としてレオン・パジェス(Léon Pagés)の名著『日本切支丹宗門史』、『補遺』(Histoire de la Religion Chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651, Paris 1869, Annexes Paris 1870.)を主として用い、これにデルプラス(Louis Delplacé S. J.), シャルルボア(Pierre-Francois-Xavier de Charlevoix

S.J.), シュルハンマー (Georg Schurhammer S.J.) の独訳のフロイス『日本史』(Die Geschichte Japans, Leipzig, 1926)等を参照しており、当時としては最良の刊本史料を使用している。それ故、今日においても修正されるべき点はあるが、ある程度まで信頼しうるものとなっている。

姉崎とほぼ時を同じくして、村上直次郎、浦川和三郎司教等によってイエズス会士日本書簡集、イエズス会日本年報が続々と邦訳されるに及んで、史料も幾分整えられてきたが、それとて年報全体のごく一部にすぎない。また手稿の原文書からではなく、適宜取捨選択されて編集された刊本よりの邦訳であったために、教会側にとって好ましくない記載はあらわれない。

昭和14年2月5日、東京と長崎で柳谷武夫、片岡弥吉を中心としてキリシタン文化研究所が発足した。姉崎正治、村上直次郎の協賛を得、新村出、幸田成友、太田正雄、土井忠生を初め、内外のキリシタン研究者及び同好者を網羅した学会であった。同会は『キリシタン研究』を第3輯まで刊行したが、太平洋戦争によって中断し、昭和22年キリシタン文化研究会と改称して再発した。昭和32年『キリシタン研究』第4輯が出版され、今日まで24輯を数えており、主要なキリシタン研究者の論文、資料の発表の場となっており、キリシタン研究の成果を世に問うている。また同会は『キリシタン研究』に載せられない長編の資料や研究を収録し、若手の研究者にも発表の機会を与えるために、昭和43年『キリシタン文化研究シリーズ』というモノグラフを刊行開始し、現在27号を数えるに至っている。

キリシタン文化研究所には上智大学の故ラウレス師(Johannes Laures S.J.)によって「キリシタン文庫」が設けられ、内外のキリシタン関係諸文献が網羅的に蒐集され、その目録として昭和15年『KIRISHITAN BUNKO』(3ed. S.32)が刊行された。「キリシタン文庫」創設の目的の1つは欧州の諸古文書館に

在るイエズス会年報の手稿原文書を蒐集、校訂し、邦訳を出すにあつたと聞いているが、遺憾ながら今日まで実現していない。キリシタン研究の基礎史料中の基礎史料ともいべきイエズス会年報の原文書が世に紹介されずにいることは、キリシタン研究の進展を著しく遅滞させているものである。ローマ・イエズス会文書館を中心として各地に散在する年報は、故シュッテ師(Josef Franz Schütte S.J.)、五野井隆史の調査(「イエズス会日本年報について——その手書本の所在を中心にして」)(『キリシタン研究』第18輯S.53)によってほぼ完全に明らかにされ、蒐集もなされているのに、刊行の兆しすらないのは全く奇異という外ない。確かにこれまでの刊本からの邦訳と異なり、原文書が紹介されるとなれば、教会側にとって好ましくない事実も表面化してくるであろう。当時の宣教師達も今日から見れば誤った選択をし、野望を抱き、また極めて人間的な行動に走った者もいたことは否定しがたいことである。しかしまたそのような人間的な誤りを犯しながらも、それを乗り越えて立派な宣教師として働き、殉教していった人々も数多く存在することも事実である。殉教者は生れつき聖人である必要はない。

ともあれ年報は私的な総会長あての書簡と異なり、かなり公的な性格を有するものであるから、現在さほど公表を控えるべき理由は見当たらない。ただイエズス会より資料の提供を受けた一部の研究者がその資料を用いて専らイエズス会を批難する(ように思われる)ような立場をとっていることが、その態度を硬直させ慎重にさせている原因の一端となっているのかも知れない。要するに問題なのは史料の取扱い方であって、一面的な見方に片寄りすぎた史料の選択、解釈は避けねば新たな歪曲されたキリシタン像を作り上げることもになりかねない。

刊本によるキリシタン研究から手稿原文書によるキリシタン研究の時代の幕をあげたのはフランシスコ・ザビエル研究の第1人者で

あったローマ・イエズス会歴史研究所のシュールハンマー師と同研究所のアレッサンドロ・ヴァリニャーノ研究の第1人者シュッテ師であったと言ふべきであろう。殊にシュッテ師の各地の古文書館の徹底的な調査に基づく『日本イエズス会史序論』(Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650 Roma, 1968) と『日本史料集 I』(Monumenta Historica Japoniae I Roma, 1975) はキリシタン研究の一大金字塔であり、膨大な史料を我々の前に提示してくれる汲めども尽きぬ泉のようなものである。惜むらくは史料を除き本文、脚注がラテン語によるために一般には用いにくいものとなっている。

邦人としては村上直次郎、岡本良知がいるが、より徹底した形で南欧諸国の古文書館に資料を渉猟し、我が国にその所在を紹介したのは松田毅一(『在南欧日本関係文書採訪録』S. 39, 『近世初期日本関係南蛮史料の研究』S. 42)である。

キリシタン時代に宣教師達の手によって書かれた多数の報告書、書簡類は現在ローマのイエズス会文書館(Archivum Romanum Societatis Iesu)、マドリッドの王立史学士院(Biblioteca de la Real Academia de la Historia)、アルカラのイエズス会トレド管区古文書館(Archivo Histórico de la Provincia de Toledo de la Compania de Jesús)、セビリアのインド文書館(Archivo General de Indias)、リスボンのアジュダ図書館(Biblioteca da Ajuda)、ロンドンの大英博物館(British Museum)をはじめとして、南欧を中心とする諸文書館に保存されている。

昭和56年上智大学キリシタン文庫主任尾原悟師は『キリシタン文庫 イエズス会日本関係文書』と題してローマ・イエズス会文書館のJaponica-Sinica 文書を中心として、その他アジュダ図書館のJesuitas na Asia、マドリッド王立史学士院のCortes(J. F. Schütte, Documentos sobre el Japón conservados en la coleccion "Cortes" de la Real Academia de la Historia, Madrid, 1961)、Jesuitas(J.

F. Schütte, El "Archivo del Japon" Vicisitudes del Archivo Jesuítico del Extremo Oriente y descripción del fondo existente en la Real Academia de la Historia de Madrid, 1964)、大英博物館のMarsden Manuscriptsの諸文書のリストを公にした。これによって一層イエズス会関係文書の検索が容易となった。

これらの未刊の手稿原文書は昭和40年代に入る頃から少しずつ日本人研究者の間でも用いられるようになってきた。これらの諸文書を駆使した日本人の手による代表的著作は高瀬弘一郎の『キリシタン時代の研究』昭和52年であり、五野井隆史の『徳川初期キリシタン史研究』昭和58年である。この他井手勝見、野間一正、岸野久等も優れた業績を挙げている。

キリシタン研究において原史料を利用するためには近世初期のポルトガル語、スペイン語、イタリア語、ラテン語の知識が要求される。19世紀のキリシタン研究はパジェス、プロフィレー、デルプラス、シャルボア等のフランス人によるところが大なのでフランス語が必要である。20世紀に入るとシリング(Dorotheus Schilling O.F.M.) シュールハンマー、ラウレス、シュッテ、チースリク(Hubert Cieslik S.J.) とドイツ人がキリシタン研究の主流をなしている。また国内史料の利用に際しては古文書解読の知識が要求される。こうなると一人の人間によって内外の原史料、研究書を十分に消化し、駆使した研究を行うということは極めて困難である。

昭和30年代頃までは邦人研究者は岡本良知を除き当代の刊本、あるいはそれらの刊本を利用した後代の研究書によるキリシタン研究の段階に留っていたが、良質の手稿原文書、写本が多数存在することが知られた現在、それらを利用しないということはそれだけで第一次資料に基いた一級の研究とは言えない現状にある。それ故、内外研究者の共同によって一日も早く基礎的な原史料が発表され、学会の共通財産とされることが望まれる。先に

述べたようにイエズス会年報の翻訳などはその最たるものである。

以上主としてイエズス会関係の史料について述べて来たが、キリシタン時代の日本宣教はポルトガル系のイエズス会の外に、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会のスペイン系の修道会によって行なわれたことは周知の通りである。日本宣教の主役がイエズス会であったために、残された史料の量からいっても研究者の数からいっても他を圧倒している。また日本人研究者もその多くがイエズス会関係史料を主として用いた業績を挙げている。

ドミニコ会の通史としてクラウディオ・ニエト師 (Claudio Nieto O.P.) の『ドミニコ会の愛と受難』 S. 47 がある。最近松山教会のドミニコ会司祭デルガード (J. Delgado Garcia O.P.) の活躍は目覚ましく、マニラのサント・ドミンゴ修道院文書館 (Archivo Provincial de la Provincia del Santo Rosario Manila) に保存されたドミニコ会関係の主要原文書及び刊本を続々と発表している。殊に『オルファネール日本キリシタン教会史』, S. 52 (Jacinto Orfanel, Historia Eclesiástica de los Sucessos de la Christiandad de Japón, desde el año de 1602. Que entro en él la Orden Predicadores, hasta él de 1620, Madrid 1633) 及び『コリャード日本教会史補遺』 S. 55 (Diego Collado, Suplemento y Adiciones a la Historia Eclesiástica de los Sucessos de la Christiandad de Japón. 1621-1622. Madrid 1633) はフロイスの『日本史』の続編とも言うべき17世紀初期日本キリシタン教会史の唯一の編年体概説史で、イエズス会以外の修道会の活動を知るために極めて貴重である。

フランシスコ会の研究者としてはシリング (Dorotheus Schilling O.F.M.), ベレス (Lorenzo Pérez O.F.M.), アッテンブレック (Thomas Uytenbroeck O.F.M. "Early Franciscans in Japan, 1959, 『16~17世紀の日本におけるフランシスコ会士たち』 S. 55) がいる。アウグスチノ会の研究者と

してはハルトマン (Arnulf Hartmann O.S.A. "The augustinians in 17th century Japan, Ontario 1965" があるのみである。

## 〔二〕現在のキリシタン研究の動向

先に昭和40年代に入ると少しずつ未刊の手稿原史料が用いられるようになったことを述べたが、刊本による研究の時期を突破したことがキリシタン研究における新たな動きを引き起している。キリシタン研究における残された国内史料はわずかであり、いきおい在欧教会側史料が用いられてきたわけであるが、それらは公的、半公的な報告書、書簡類が主であり、修道会の内部的対立あるいは財政に関するような問題は教化的な目的によって意図的に削除されてきた。よって高瀬弘一郎の言うように「従来は主として宣教師の布教活動や信徒の信仰生活、学問、思想、教育等文化的な方面での教会活動——言いかえれば教会活動本来の目的にそったキリシタン史の側面のみが主として研究対称」となってきたことは否めない (高瀬「キリシタンと統一権力」『岩波講座日本歴史9』P. 196)。

明治10年のヴィリオン (Aime Villion M. A.) の『日本聖人鮮血遺書』や木下李太郎、北原白秋、新村出らの一連のキリシタンものの著作によって大正より昭和初期にかけてキリシタンブームが起っている。過去の研究者はおしなべて研究に際し、日本人としての贖罪意識によるものか、あるいは被迫害者への同情によるものか、キリシタンに対して好意的、同情的な立場をとっている。先に述べた史料の制約にもよるが、殉教史の研究が1つの大きな柱となっており、各地方の殉教者の研究、遺跡、遺物の発掘及び顕彰が現在に至るまで地方におけるキリシタン研究のメインテーマの1つになっている。

そこで殉教史に片寄り、余りにも美化されすぎたキリシタン研究はキリシタン史の他の側面を看過し、包括的な研究となっていないという批判が生れてきた。その代表的なものが高瀬弘一郎のキリシタンの政治・経済史的

側面の研究である。その立場は「(スペイン・ポルトガルの)イベリア両国が海外に進出し版図を拡大した大航海時代におけるカトリック布教の位置づけに基づいて(日本における)キリシタン布教を把握することを目指さねばならない。」(高瀬 idem. P. 196)ということである。

結論的には日本におけるキリシタン宣教師たちはイベリア両国の国家事業の一環として日本布教を行ない、その背後にある国家的利害に拘束され、殊にイエズス会士たちは余りに貿易に深入りしすぎて商人化し、世俗事を超越した精神的教師になりきれなかった。スペイン・ポルトガルの軍事的、精神的日本争奪の抗争がキリシタン布教を混乱に陥れ、日本の為政者に不信感を与え、禁教の重大な要因となったと言う。

確かにイエズス会内の一部に日本の軍事的征服の夢を描いた人々がいたとしても、それをイエズス会全体の日本布教の性格として捉えることは無理であり、何よりも1614年の大禁教令以降の多数の殉教した宣教師たちの行動を説明することができない。財政困難ゆえ商人化せざるを得ず、宣教師でありながらそのような職務に好むと好まざるとにかかわらず携わらねばならなかった、当時の財務担当パードレの嘆きにも耳も傾けねば、また一方に片寄りすぎたキリシタン史の見方と言わざるを得ないであろう。

未刊の原史料が今後続々と公開されるにつれ、当時の宣教師たちや彼等に従って活動した日本人たちの赤裸々な生き様が明らかにされてくることは確実である。その中には人間的な弱さや誤ち、嘆きも見出されるであろうし、また美しい人間の精神活動も含まれていることであろう。今後のキリシタン研究はキリシタンの運動は第一義的に宗教運動であったという原点を踏えた上で、その世界観、人間観を先入主を棄てて共感的に理解し、その上で諸史料を厳密な考証を経て客観的、実証的に取扱い、宗教史、思想史のみならず、政治・経済史、文化史、国語学史、神学、社会

学、民俗学等々の多側面より広く総合的にキリシタン運動とは何であったのかを問うてゆく必要がある。

### 〔三〕最近10年間における主要参考文献

#### (a) 宗教史

宗教史の分野ではまず史料の翻訳紹介が大きな位置を占める。それらの主要なもの『キリシタン研究』及び『キリシタン文化研究シリーズ』に発表されている。先に述べたシュッテ師の『Monumenta Historica Japoniae I』、松田毅一、川崎桃太共訳のポルトガル語写本からの『フロイス日本史』の全訳、デルガート師のドミニコ会関係文書の翻訳は極めて注目すべき業績である。

殉教史関係の個別的史料、研究は数多く枚挙にいとまがないが、中でも片岡弥吉の大著『日本キリシタン殉教史』は著者の長年の研究の集大成であり、殉教史を中心とするよくまとまった通史となっている。清水絃一の近世封建制との関わりの中で、日本史料を丹念に検討し、制度的完成に至る過程を明らかにしたキリシタン禁制史関係の著書、論文は優れている。五野井隆史の『徳川初期キリシタン史研究』は徳川幕府草創期におけるキリシタン禁教政策とイエズス会の対応をイエズス会文書館の原史料を駆使して解明した労作で、従来知られることの少なかった禁制下のイエズス会士と、彼等を助けて働いた同宿、小者、看坊らの動向を明らかにしている。

この分野では他に秀吉の天正禁令、島原の乱、鎖国及び明治初期の浦上信徒流配等が主要なテーマとなっている。また矢島浩の一連の類族帳の翻刻が続いているが、それらの史料をもとにした歴史学的社会的考察が加えられた研究が早く世に現われるのを待ち望みたい。

青山 玄

S. 55 「浦上キリシタンの名古屋藩預け」(『キリシタン研究』22輯)

- 吉川弘文館)
- アッテンブロック
- S. 55 『十六世紀の日本におけるフランシスコ会士たち』石井健吾訳 中央出版社
- J.L. Alvarez - Taladriz
- S. 49 “Hermanos o Dogicos?” Sapiencia, The Eichi Univ. Review No. 8 Osaka
- S. 57 “En el IV Centenario de la Embajada cristiana de Japón a Europa Las “INSTRUCCIONES” del Visitador ALEJANDRO VALIGNANO S.J.(1583),” Sapiencia The Eichi Univ. Review No. 16 Osaka
- 今村義孝
- S. 52 「近世初期宗門人別改めの展開について」(『キリシタン研究』17輯)
- 越中哲也
- S. 55 「長崎における初期禁教政策の一考察」(『キリシタン研究』20輯)
- 海老沢有道
- S. 51 『地方切支丹の発掘』柏書房
- S. 56 『キリシタンの弾圧と抵抗』雄山閣
- S. 58 「キリシタン誓詞の補足的ノート」(『キリスト教史学』第37集)
- 尾原 悟編
- S. 56 『キリシタン文庫 イエズス会 日本関係文書』南窓社
- 片岡弥吉
- S. 47 「異宗門徒人員帳の研究」(『キリシタン研究』14輯)
- S. 54 『日本キリシタン殉教史』時事出版社
- 片岡瑠美子
- S. 51 『キリシタン時代の女子修道会—みやこの比丘尼たち—』キリシタン文化研究シリーズ14
- 加藤栄一・山田忠雄編
- S. 56 『講座日本近世史2 鎖国』有斐閣
- 岸野 久
- S. 52 「るすん壺」貿易の歴史的役割—教会史料を主として」(『キリシタン研究』17輯)
- S. 58 「フランシスコ・ザビエルのシナChina情報と布教構想」(『キリシタン研究』23輯)
- Cooper Michael S.J.
- “Rodrigues the Interpreter”  
Weatherhill New York
- 五野井隆史
- S. 51 「リスボン市在国立トーレ・ド・トンボ文書館収蔵「モンズーン文書 Livros das Moncoes」について」(東大史料編纂所報第11号)
- S. 53 「イエズス会日本年報について—その手書本の所在を中心にして」(『キリシタン研究』18輯)
- S. 58 『徳川初期キリシタン史の研究』吉川弘文館
- 佐久間正訳
- S. 48 『続ベドゥロ・モレホン日本殉教録』キリシタン文化研究シリーズ11
- S. 49 『ベドゥロ・モレホン日本殉教録』キリシタン文化研究シリーズ12
- 清水紘一
- S. 51 「宗門改役ノート」(『キリスト教史学』第30集)
- S. 52 「禁教政策の展開」(中田易直編『近世対外関係史論』有信堂)
- S. 52 「キリシタン関係法制史料集」(『キリシタン研究』17輯)
- S. 54 「キリシタン訴人褒賞制について」(『キリシタン研究』19輯)
- S. 56 『キリシタン禁制史』教育社
- シュッテ編
- S. 50 『大村キリシタン史料—アフォンソ・デ・ルセナの回想録』佐久間正, 出崎澄男訳 キリシタン文化研究シリーズ12 (“Erinnerungen aus der Christenheit von Omura” Sophia University Tokyo 1972)

- S. 50 “MONUMENTA HISTORICA  
JAPONIAE I” Roma  
高瀬弘一郎
- S. 49 「キリシタン時代、インドにおける日本  
イエズス会の資産について(上)(下)」  
(史学第46巻第1号, 第2号)
- S. 50 「江戸幕府のキリシタン禁教政策と教  
会財政」(史学第47巻第1, 2号)
- S. 50 「キリシタンと統一権力」(『岩  
波講座日本歴史9・近世1』)
- S. 52 「キリシタン教会の貿易活動ー托  
鉢修道会の場合について」(史学  
第48巻第3号)
- S. 53 「キリシタン教会の貿易活動ーマ  
カオ=長崎間以外の貿易について  
」(『キリシタン研究』18輯)
- S. 55 「成立期の糸割符とパンカダ・パ  
ンカダ取引について」(『キリシ  
タン研究』20輯)
- S. 56 『イエズス会と日本 I』(岩波  
大航海時代叢書第Ⅱ期6)
- S. 57 「キリシタン時代における府内司  
教区の経済基盤について」(史学  
第51巻第4号)
- S. 58 「キリシタン時代における“教商”  
について」(古文書研究第21号)
- S. 58 「キリシタン教会のマカオ駐在財  
務担当パードレ(上)」(史学第5  
3巻第1号)
- S. 59 「キリシタン教会のマカオ駐在財  
務担当パードレ(中)」(史学第  
54巻第1号)
- 只野 淳
- S. 53 『みちのく切支丹』富士クリエイ  
ティブハウス
- 圭室文雄
- S. 55 『江戸幕府の宗教統制』評論社
- チースリク(Hubert Cieslik S.J.)
- S. 53 「白杵の修練院」(『キリシタン  
研究』18輯)
- S. 54 『熊谷豊前守元直ーあるキリシタ  
ン武士の生涯と殉教』キリシタン  
文化研究シリーズ17
- S. 56 『キリシタン時代の邦人司祭』  
キリシタン文化研究シリーズ22
- S. 56 「殉教者一族 生月の西家」(  
『キリシタン研究』21輯)
- S. 59 「マツス神父の回想録」(『キリ  
シタン研究』24輯)
- デルガード(J. Delgado Garcia O. P.) 編註
- S. 51 『福者ホセ・デ・サン・ハシン  
ト・サルバネスO. P. 書簡・報  
告』佐久間正訳 キリシタン文  
化研究シリーズ13
- S. 52 『オールファネール 日本キリン  
タン教会史』井手勝見訳 雄松堂
- S. 55 『コリヤード 日本キリシタン  
教会史補遺1621-1622』井  
手勝見訳 雄松堂
- S. 57 『福者アロンソ・デ・メーナO.  
P. 書簡・報告』佐久間正訳 キ  
リシタン文化研究シリーズ23
- S. 58 『福者ハシント・オールファネー  
ルO. P. 書簡・報告』佐久間正  
訳 キリシタン文化研究シリーズ25
- S. 59 『福者トマス・デル・エスピリ  
トゥ・サント・デ・スマラガO. P.  
書簡・報告』キリシタン文化研  
究シリーズ26
- 中村 質
- S. 50 「島原の乱と鎖国」(『岩波講  
座日本歴史9 近世1』)
- ビルケ(Bernward H. Willeke O.F.M.)
- S. 58 「フランシスコ会の殉教者フラ  
イ・ルイス・ゴメス・パロミノ  
」(『キリシタン研究』23輯)
- 平井誠二
- S. 57 「天正15年6月18日付キリシ  
タン禁令について」(中央史学5号)
- ファンハーレン
- S. 56 『ファン・ハーレン日本論ー日  
本キリシタンとオランダ』井田  
清子訳 筑摩書房
- ペレス (Lorenzo Pérez O.F.M.)

- S. 57 「福者アポリナリオ・フランコ伝」(『キリシタン研究』22輯)  
 “Beato Apolinar, El Eco Franciscano, Santiago 1910”

松田毅一

- S. 50 『キリシタン研究第2部論攷篇』  
 風間書房  
 S. 50 『南蛮の世界』東海大学出版部  
 S. 52-55 『フロイス日本史』12 Vol.  
 川崎桃太共訳 中央公論社

三鬼清一郎

- S. 49 「キリシタン禁令をめぐって」(『日本歴史』338号)  
 S. 58 「キリシタン禁令の再検討」(『キリシタン研究』23輯)

宮崎賢太郎

- S. 59 「1614年度・1620年度イエズス会日本管区秘密カタログについて」(『キリシタン研究』24輯)  
 S. 60 『カルロ・スピノラ伝』キリシタン文化研究シリーズ27

安野真幸

- S. 57 「伴天連追放令とイエズス会」(『日本歴史』406号)

柳田利夫

- S. 53 「キリシタン教会内の非会員日本人I, II」(史学48巻第4号, 49巻第1号)  
 S. 57 「文禄・慶長の役とキリシタン宣教師」(史学第52巻第1号)

結城了悟(パチェコ・ディエゴ Pacheco Diego)

- S. 50 『鹿児島の子キリシタン』春苑堂  
 S. 53 『九州キリシタン史研究』キリシタン文化研究シリーズ16  
 S. 56 『天正少年使節の中浦ジュリアン』日本26聖人記念館  
 S. 59 『雲仙の子キリシタン』日本26聖人記念館

#### (d) 思想史

思想史の分野における最大のテーマはキリ

スト教の土着化の問題であろう。遠藤周作の『沈黙』を持ち出すまでもなく、ザビエル、ヴァリニャーノ以来今日に至るまで最も関心の深いテーマである。この問題に関する基本的な文献はヴァリニャーノの“Sumario de las cosas de Japón”1582(邦訳『日本巡察記』S. 48)である。少し古くなるが、海老沢有道の『日本キリシタン史』第4章パードレの日本理解S. 41, チェスリクの「日本における最初の神学校」S. 40, 井手勝見の「東インド巡察使A. ヴァリニャーノの日本人観」S. 42があり, 最近葛井義憲の『キリスト教土着化論』S. 54が出ている。しかし, キリスト教の土着化の問題は十分に論じ尽されているとはいえない。現代におけるキリスト教宣教の最大のテーマの1つでもあり, 今後新史料の紹介とともに更に議論が深められていくことが望まれる。

土着化の問題とも関わりがあるが, ファビアンとその著作『妙貞問答』, 『破提字子』は比較的議論の対象となっている。比較文化論的立場からファビアンを論じたものにイザヤ・ベンダサンの『日本教徒—その開祖と現代知識人』S. 54, 山本七平の『受容と排除の軌跡』S. 53があり, 教会側史料を用いた史的研究に井手勝見の「背教者・不干斎ファビアンの生涯」S. 48, 同「背教者・不干斎ファビアンの生涯(補説)」S. 52がある。

神学的研究の最も注目すべきものはイエズス会士でローマ・グレゴリアン大学教授のロペス・ガイ(López Gay S. J.)の業績である。『初期キリシタン時代の準備福音宣教』S. 43(S. 55改定), 『十六世紀キリシタン史上の洗礼志願期』S. 48, 『キリシタン時代の典礼』S. 58の三部作はその代表的なものであり, キリスト教が全く異質の日本社会に始めて接触し, それらに対応, 克服してゆく間の諸問題を神学的, 布教学的に分析したものである。

原史料の紹介が緒についたばかりの現在ではまだ十分なキリシタンの思想史的研究は行なわれているとはいえない。



イザヤ・ベンダサン

- S. 51 『日本教徒—その開祖と現代知識人』山本七平訳 角川書店

井手勝見

- S. 48 「背教者不干斎ファビアの生涯」(広島工業大学紀要7-2)  
S. 52 「背教者不干斎ファビアの生涯(補説)」(史学第48巻第1号)

海老沢有道

- S. 49 「日本におけるキリスト教受容の前提的研究視点」(キリスト教史学第28集)  
S. 53 『南蛮学統の研究(増補版)』創文社  
S. 56 『日本の聖書 聖書和訳の歴史』日本基督教団出版局

ガイ(López Gay S. J.)

- S. 43(改定S. 55) 『初期キリシタン時代の準備福音宣教』井手勝見訳 キリシタン文化研究シリーズ1 (La preévangelizació n, << Missio- nalia Hispanica >>, 19 1962)  
S. 47 「日本の神学者ペドロ・デ・ラ・クルスのフランシスコ・スアールス学説批判」井手勝見訳(『キリシタン研究』14輯)(Censuras de Pedro de la Cruz. S. J., teó- logo del Japón, a las doctrinas de Francisco Suárez, año 1590, << Archivo Teológico Granadino >>, 30 1967)  
S. 48 『十六世紀キリシタン史上の洗礼志願期』井手勝見訳 キリシタン研究シリーズ8 (El Catecume- nado en la misión del Japón del s. XVI, Roma 1966)  
S. 58 『キリシタン時代の典礼』井手勝見訳 キリシタン文化研究シリーズ24 (La Liturgia. en la misión del Japón del s. XVI, Roma 1970)  
S. 58 「キリシタン時代の靈的動向」井手勝見訳(『キリシタン研究』23

輯)(Las corrientes espirituales de le misión del Japón en la segun- da mitad del s. XVI, << Missionaria Hispanica >> 28 1971, 29 1972).

葛井義憲

- S. 54 『キリスト教士着化論』朝日出版社

河野義祐

- S. 53 「サカラメンタ提要」における婚姻の秘跡」(『キリシタン研究』18輯)

小山恵子

- S. 55 「キリシタン宗門と吉田神道の接点—「天道」という語をめぐって」(『キリシタン研究』20輯)

チースリク

- S. 47 「ファビアン不干伝ノート」(キリシタン文化研究会会報第15年第3号)

松田毅一他

- S. 48 『日本巡察記』東洋文庫229 平凡社 (Alessandro Valignano S. J. "Sumario de las cosas de Japón 1583, Adiciones del Sumario de Japón 1592)

廣瀬和雄

- S. 53 「キリシタンと神道との交渉」(キリスト教史学第32集)

山本七平

- S. 53 『受容と排除の軌跡』主婦の友社

### (c) 国語学・国文学

最近の印刷技術の急速な進歩によってキリシタン版の複製事業が進み、その主要なものは今日ほとんど複製による原典版が利用可能であり、また翻訳、注釈本も盛んに出版されている。

国語学、国文学の分野からはキリシタン版の重要性は早くより認識され、新村出、姉崎正治、橋本進吉、土井忠生、山田俊雄、大塚高信、終源一、海老沢有道を初めとする諸研究者が輩出し、キリシタン研究の主要な1ジャンルを形成していた。しかるに初期の優れた労作— 橋本進吉『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』S. 3, 姉崎正治『切支丹宗教

文学』S. 7, 海老沢有道『切支丹典籍叢考』S. 18, 土井忠生『吉利支丹語学の研究』S. 17『吉利支丹文献考』S. 38, 新村出・柗源一『吉利支丹文学集上, 下』S. 32, 35 以後キリシタン版の日本文化史的, 宗教史的意義について本格的に論じられたものはあまり見かけないように思われる。

最近の優れた業績は福島邦道の『キリシタン資料と国語研究』S. 48であろう。キリシタンに限定せず広く資料を求め, 研究文献の綿密な検討の上に論を進め, 諸問題点を指摘している。現在における最も信頼すべき研究史的書である。この外, 土井忠生, 森田武, 長南実編訳『邦訳日葡辞書』S. 55はキリシタン研究者にとって利用価値の高いものである。

海老沢有道編

- S. 52 『南蛮所在吉利支丹版集録』雄松堂
- S. 59 「さんとあれしよ・こんへそるの御さ行」写本校註(『キリシタン研究』24輯)

大塚高信

- S. 59 『キリシタン版エソポのハプラス私注』臨川書店

亀井 孝・チースリク・小島幸枝

- S. 58 『日本イエズス会版キリシタン要理』岩波書店

小島幸枝

- S. 57 「『スピリッアル修行』における待遇表現」(『キリシタン研究』22輯)
- S. 59 「『スピリッアル修行』の文体—時制の訳出より見たる—」(『キリシタン研究』24輯)

土井忠生

- S. 49 「十六・七世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題」(『キリシタン研究』15輯)
- S. 51 『日本文典』解題土井忠生, 書誌解説三橋健 勉誠社
- S. 55 『邦訳日葡辞書』土井, 森田武, 長南実編訳 岩波書店

富永牧太

S. 53 「キリシタン版文字攷」

林田 明

S. 50 『スピリッアル修行の研究 翻字・影印篇』風間書房

福島邦道

S. 48 『キリシタン資料と国語研究』笠間書院

松岡光司

S. 56 「中世末の訳語試論—コンテムツス・ムンジの訳語と羅葡日対訳辞書の訳語の比較考察」(『キリシタン研究』21輯)

三橋 健

S. 53 『ロザリオ記録』本文篇, 解題篇 桜楓社

森田 武

S. 51 『天草版平家物語難語句解の研究』清文堂

#### (d) 文化史

従来の文化史的研究の三本柱は①南蛮美術—殊に南蛮屏風を中心とした研究 ②地図の研究を主とした地理学的研究 ③研究自体は余り進んでいないが フロイスの『日欧文化比較』, ロドリグスの『日本教会史』, ヴァリニャーノの『日本イエズス会士礼法指針』等の紹介による比較文化的研究であったと言えよう。

しかし, 最近発展をみせているのは音楽史の分野である。昭和51年キリシタン時代における教会典礼音楽の日本移入について論じた, ロベス・ガイ師の(*La Liturgia en la Misión del Japón siglo XVI. Roma 1970*)の第三章が「キリシタン音楽—日本洋学史序説」(『キリシタン研究』16輯)として紹介され, 昭和58年には海老沢有道によって西洋音楽の日本伝来に関する通史が著わされた(『洋楽伝来史—キリシタン時代から幕末まで』)。また皆川達夫は昭和51年東芝レコードTW-80002~3において, 1605年(慶長10)長崎版サカラメント提要(*Manuale ad Sacramenta Ecclesiae Mini-*

stranda. Nangasaquij M. DCV.) に記載されたグレゴリオ聖歌全曲を復元録音した。

また長崎県生月島のかくれキリシタンの中に歌いつながれている三曲の歌オラショ「らおだて」「なじょう」「ぐるりよざ」とその原曲と推定されるグレゴリオ聖歌“Laudate Dominum”, “Nunc dimittis”, “O Gloriosa”をおさめて対比させ、キリシタン時代の西洋音楽の復元を試み、四百年間におけるグレゴリオ聖歌の施律の日本の変形の跡をたどっている。

相原良一

- S. 54 「アジアにおけるイエズス会の地図製作と南蛮屏風世界図の南大陸」(『キリシタン研究』19輯)

海老沢有道

- S. 58 『洋学伝来史——キリシタン時代から幕末まで』日本基督教団出版局

岡本良知

- S. 48 『十六世紀における日本地図の発達』八木書店

ガイ (López Gay S. J.)

- S. 51 「キリシタン音楽——日本洋学史序説」(『キリシタン研究』16輯) “La Liturgia en la Misión del Japón del siglo XVI. Cap. III Roma 1970)

片岡弥吉

- S. 51 「キリシタン墓碑の源流と墓碑型

式分類」(『キリシタン研究』16輯)

坂本 満・吉村元雄

- S. 49 『南蛮美術』小学館

菅野 陽

- S. 49 『日本銅版画の研究 近世』美術出版社

丹野 郁

- S. 51 『南蛮服飾の研究』雄山閣

松田毅一

- S. 48 「キリシタンと十字記号の研究」(京都外国語大学創立25周年記念論文集)

- S. 51 「近世初期の日本金石文、及び南蛮美術品におけるローマ字について」(京都外国語大学研究叢書XVI)

間庭辰蔵

- S. 51 『南蛮酒伝来史』柴田書店

皆川達夫

- S. 51 『洋学事始』東芝レコードTW80002~3

- S. 56 『オラショ紀行』日本基督教団出版局

(筆者は1977年から81年までイタリアに在ったことと、現在長崎の遠隔地に居ることによって管見に入らなかった文献も数多いことと思われる。寛恕を乞うとともに御教示をお願いしたい。)